



リーダーズインタビュー

サイボウズ株式会社 社長
青野慶久氏

- ◆ イベント告知
- ◆ 「FRUIT」活動報告

■ GCL リーダーズインタビュー 青野慶久氏

研究、ビジネス、さまざまな分野のリーダーたちへのインタビュー連載、「リーダーズインタビュー」。今回は、株式会社サイボウズ代表取締役社長、青野慶久氏へのインタビューです。電腦を意味する「cyber」と「坊主」をつなげた面白い社名のこの企業。「チームワークあふれる社会をつくる」をミッションに、会社やチーム内の情報共有を効率化し皆がスムーズに働けるためのツール開発を行う中で、個性や働き方の画一化で成長してきた日本の凝り固まった概念を覆そうとしている。ツール屋だからこそわかってきた多様性を理解することの重要性や、ツール屋だからこそできる取り組みとは何か。



—サイボウズはグループウェア開発を中心事業としながらも、その他にチームワークや多様性の重要性に主眼を置いた様々な事業を展開されています。例えば自社メディア「サイボウズ式」の運営やワークスタイルムービーの制作、また青野さんご自身が3度の育児休暇を取られるなど。サイボウズという会社を通して何を実現しようとお考えですか？

私たちが掲げているミッションは「チームワークあふれる社会をつくる」こと。世の中にたくさん会社やチームがある中で、チームワークって案外うまく機能していない部分が多くて、苦しい顔をして働いている人がたくさんいる。皆がチームに参加してチームワークを高めることで解決できる問題が山ほどある。チームワークで嬉しく楽しく働ける世の中を作りたいと思っています。

そのためにツールも必要だけれど、ツールだけでは

ダメだということがわかってきて。お客様の会社の人事制度を含めた仕組みであったり風土であったりを変える必要があると思ったんですね。在宅勤務とかもやっていいよねと。育休が取れないとか在宅勤務がダメとかっていう不合理なシステムによって、もっと高められるはずのチームワークが発揮できていない。そういうものを覆していきたい。

そうすると、僕らはツールを作るだけでなく世の中の見方や考え方を変えていく必要があって、サイボウズはそこに責任を取りたいと思っています。それがサイボウズ式であったり働くお母さんを応援する動画であったり。皆、都会で働くお母さんがどれだけ大変か知らないんですよ。まず知ることから始めないと何も解決しないので、僕らはそれを責任をもって発信していきたいです。

—どうして責任を感じるのですか？

2005年にサイボウズの離職率が28%になったことがありました。それまでITベンチャーだから離職率20%ぐらいが当たり前だと思ってやっていましたが、その年にグンと上がって「これはマズイぞ」と思いました。人材を採用するのも教育するのも大変だし、もう少し皆が働き続けやすい会社を作ったらどうだろうかと思ったんですね。

そこから何が必要か皆に意見を聞きながら、結婚や出産、身内の病気などのライフイベントがあったときに働き続けられる制度と社内の風土を整えてきました。そうした中で、働くお母さんや男性の育児などの苦労や重要性を感じて社会に訴えていく必要があるなと思ったんです。

別に過去を否定するつもりはないんですが、今まで日本は男女という役割を決めつけ過ぎていましたよね。高度経済成長の際はこの役割分担が機能していました。経済成長時に女性にも活躍してもらおうと対応した国々がある一方で、日本は男性にもっと働いてもらって更なる経済成長を目指した。女性は家庭を守り、男性は会社でガッツリ働いてもらうことが問題解決への方法だと思っていた。

でも今、その役割分担という固定概念で失うものの方が大きいんじゃない？その決めつけおかしくない？ということが起きています。男性でも女性でもいろんな人がいるし、本来人間はすごく多様なのに性別だけで判断しちゃっているんですよ。

—現在の世の中で、様々な人が働きやすくするためにはどういうことが必要なのでしょう？ そうな — 進学しないで働いてよかったと思うことってありますか？

基本は多様であることを受け入れて制度や風土を作っていくことが必要だと思います。例えば選択的夫婦別姓の問題にしても、本人が夫婦別姓が良いって言っているのに何で認めてあげないの？みたいな。多様性を受け入れずに、押し付けちゃっている。「もっといろんな人がいてもいいよね」という柔軟な姿勢で制度を変えていかないと、と思いますね。

—多様性という部分で、障害者に関してはどうお考えですか？

健常者も障害者もあまりくっきり分かれていないと思っています。目が悪かったり背が低かったり、皆それぞれ持っているものが違うだけだよって話です。その持っているものの得意なところを皆で出し合って楽しく働こうぜ、ということが多様性を受け入れたチームワークのあり方だと思うんです。

障害者の人がなかなか働く場所を見つけられないという問題はありますが、まず障害者も健常者も様々な人がいていいと当たり前に見える風土が重要だと思います。

—具体的になされている取り組みはありますか？

ITの力って凄くって、私の名刺は親指しか動かない重度障害の方が作ってくれているですよ。彼が働く場所がないので起業したんですけど、健常者並みに稼いでいます。あるときネットで僕に話しかけてきてくれて、「私の顧問をしてくれませんか？」と。ネットが無かったらきっと出会えていません。

ツール屋が出来るのは、限られている能力であったとしても残った能力を最大限引き出すことだなと実感しています。僕たちはそうした人たちや社会福祉の前線に立つ人たちに後ろから武器を渡す感じですね。

—優れた経営者であるために必要なこととは何だと思いますか？

「優れた経営者」って何を持ってそういうのか難しいですよ。 「優れた」という一つのものさしを置いた瞬間…例えば「売り上げや利益を伸ばした人」というものさしを置いたとしましょう。その瞬間にその部分でしか計れなくなって多様性の面白さが無くなってしまふ。どのように優れているのかという物差しはいろいろあると思います。ただ、自分の物差しを強く持たないと世の中の流れに負けてしまいます。

サイボウズだと、売上利益を追わないと決めました。「チームワークあふれる社会を作る」というミッションにおいてはこだわる部分ではないなど。業績発表する度に、サイボウズの売り上げはどうだなどとメディアが書いているのを見て「やっぱり売り上げ伸ばしたほうがいいのか？」と悩んだりすることもあるのですが、自分が「こんな社会を作りたい」と思ったらブレないことが大事ですね。

自分が実現したい理想に徹底的にこだわる。誰がどんなことを言ってもね。言い換えると、他のものを全て諦める「理想への覚悟」が大切です。

—未来のリーダーたちへのメッセージをお願いいたします。

結局は好き勝手に生きて欲しいですね。「こう生きなきゃいけない」といろんな人がいろんなことを言いますが、別にその必要はないと思います。スカートを履きたかったら履けばいいし、髪を染めたかったら染めればいい。

でも自由に生きるって案外難しいもの。「ラッキー！好き勝手に生きよう！」と思うけれどじゃあ明日から

何しよう？ってことですよ。自分が本当に好きなことを見つけるにはすごい自問自答しなきゃいけないし、それは変わってもいくものです。自分の好きなことを見つけるには、ちゃんと考え続けること。私自身、今も常に考えています。これだ！と思ったとしても翌年には微修正することもありますし。

ー青野さんにとっては中学時代からやられているプログラミングが当てはまりそうですが…？

いやー、学生のときに大学の先輩でありサイボウズの共同創業者の畑さんのプログラミングを見て、こんなすごいおれには書けない、勝てないなって思ったんですよ。個性って、先天的に備わったものもあれば相対的に磨かれていくものもあると思います。万能細胞なんかも周りの細胞とコミュニケーションしながら自分が何の細胞になるか決めていくみたいな。

本当に自分がやりたいことを自分の中だけで考えていくって難しいですが、周りとの接点を持つ中で「僕はこれだったらできるぞ」とか、「これだったら喜んでもらえそうだな」とか見つけていくことができると思うんですよ。個性とかやりたいことは答えがないですが、探していく過程は楽しいし見つけたときにはすごく嬉しい。決して他人の言うように生きる必要はないですよ。

取材： 新多可奈子・須田英太郎・井手佑翼
文： 新多可奈子

※本企画は東京大学新聞オンラインとの共同企画です。

青野慶久

サイボウズ株式会社代表取締役社長。1971年愛媛県生まれ。中学生の頃からプログラミングに親しみ、大阪大学工学部情報システム工学科卒業後、松下電工(現パナソニック)に就職。90年代のインターネット時代の到来でより効率的なグループウェアの開発をしたと1997年サイボウズ株式会社を設立。2005年に代表取締役社長に就任。

イベント告知

◆2016/02/27 Workshoppers2016: GCL グローバルデザインワークショップ第3回報告会

東京大学が進めるGCL(ソーシャルICTグローバル・クリエイティブ・リーダー育成プログラム)のなかで、ワークショップの教育研究をおこなうGDWS(GlobalDesign Workshop)の3年目の成果報告会を開催します。

GDWSは大学院レベルの実践的研究方法として、ワークショップをいかに進め、体系化していくかに取り組んできました。

2015年度の活動を関係者のみなさんとともに振り返り、考えていく場を持ちたいと思います。

ふるってご参加ください！

日時：2016年2月27日(土)13:00-18:00

場所：東京大学大学院情報学環福武ホール 地下2階 福武ラーニングシアター、ホワイエ

言語：Japanese 日本語

Program

12:30- Doors Open 開場
13:00-13:15 Opening Speech 開会挨拶、趣旨説明

13:15-14:00 Overview of GDWS WS A・B 2015
2015年度のWS AとBダイジェスト発表

14:00-14:30 Overview of GDWS WS C 2015
2015年度のWS C発表

14:30-15:30 Poster Session 20あまりのWSを段ボールをもちいてポスターセッションします。

15:30-17:00 Panel Discussion 実践的研究方法としてのWSについて考えます。

○登壇者(敬省略)：

- 渡邊英徳(首都大学東京)

- 渡辺ゆうか(FabLabKamakura,LLC 代表/慶應義塾大学SFC研究所 訪問研究員)

17:30-18:00 Discussion & Party 交流しながら議論を交わします。

18:00 Close 閉会

◆GCL TechTalk シリーズ

◇Global Design Seminar:「NTT研究所のご紹介」,「錯覚から探る人間の情報処理の仕組みの解明とその応用」,「オープンドメイン言語処理に向けた取り組み」

日時：2016年2月24日(水)14:55-15:50

場所：東京大学工学部2号館3階電気系会議室1AB

■講演1(5分)

タイトル:「NTT研究所のご紹介」

講演者: 都甲 浩芳(NTT 研究企画部門)

■講演2(発表20分、質疑5分)

タイトル:「錯覚から探る人間の情報処理の仕組みの解明とその応用」

講演者: 兩宮 智浩(NTTコミュニケーション科学基礎研究所 主任研究員/特別研究員)

概要:

NTTコミュニケーション科学基礎研究所は、人間と情報を結ぶ新しい技術基盤の構築のための基礎研究を行っている。本講演では、人間の感覚・知覚特性の一つである錯覚現象を通じて人間の情報処理の機序を探り、そこで生まれた手法を情報通信技術やインタフェースに活用する研究開発事例を紹介する。

■講演3(発表20分、質疑5分)

タイトル:「オープンドメイン言語処理に向けた取り組み」

講演者: 東中竜一郎(NTTメディアインテリジェンス研究所 主任研究員)

概要:

人間のように言語を理解するコンピュータを実現するためには、特定のドメインに依存しないオープンドメイン言語処理の技術が必要である。本講演では、そのような言語処理の例として、質問応答技術と雑談対話技術について説明する。

◇Global Design Lecture:「自由貿易と規制緩和の利益を再考する」

日時:2016年2月24日(水)15:50-16:40

場所:東京大学工学部2号館3階電気系会議室1AB
タイトル:「自由貿易と規制緩和の利益を再考する」

講演者:鈴木 宣弘(東京大学大学院農学生命科学研究科 農学国際専攻 国際環境経済学研究室・教授)

概要:

自由貿易と規制緩和の「利益」とは誰にとっての利益なのか、企業の経営陣や投資家の利益と、雇用者の利益や健康・環境の改善とが対立していないか、TPP(環太平洋連携協定)などを事例に考える。

「FRUIT」活動報告

■FRUITとは？

昨年12月に発足したプロジェクトチーム「Facilitation and Reinforcement of UnITy (FRUIT:フルーツ)」という名前のプロジェクトチームです。現在のメンバーは、コース生M2(2016年度)の赤池(マネジメント)、青木(臨床心理)、増田(公共健康医学)、寺田(都市工学)の4名でスタートしました。

■誰がなにを研究し、誰を求めているの？

11月のプレゼンコンペに向けた勉強会をしている時「研究領域と一緒にコラボしたい人が一目でわかるマップが欲しい」そして「GCL活動をもっと楽しみたいよねっ!」という一言から始まりました。確かに、M1の1年の間に合宿、講義、ワークショップ等々、GCL活動が進みましたが、GCLの醍醐味である多様な知識や経験をもつコース生同士が『コラボレーション』しきれてなかったり、社会的イノベーションを起こそうとする同志と『コミュニケーション』しできていない現状に、何か物足りなさを感じていました。そしてその考えに賛同した仲間が集まりこのPJTは発足しました。

■活動の目的は？

この活動の目的は、「GCLコース生が参加するプロジェクトの生産性を高めるための基盤づくりを行う」ことです。現在、多くのコース生の方が自身の研究活動とともにICTに関連した社会イノベーションプロジェクトを推進しています。各プロジェクトをより円滑に、生産性を高めていくために私達としてはその『基盤』を整備したいと思っています。そうした基盤が整うことで、コース生が活動しやすく、かつ研究者・実践者としてパフォーマンスをあげることができると思っています。

■具体的な活動内容・目標は？

研究環境・基盤を整備するためには、以下のことが求められると考えています。

- コース生の意見集約とともに提言(事務局や先生方との協働)
- プラットフォームの提供(各種説明会やWSなどの企画・運営)
- ツール作成(コース生の関心領域などの人材マッピング作成)
- GCLラボの設備環境を整備(備品活用のための取り組み・整備)



2月に2015年度M1へアンケート調査を実施しました。その結果からも多くの課題が見えてきました(分析,結果については別途報告)。大きな課題として、情報不足による機会損失,活動趣旨の理解不足・他コース生との関係性が見えてきました。最後の「他コース生との関係性」とは、多くのコース生は他のコース生のことをもっと知りたいと感じ、できればコラボレーションしていくことをしたいと思っています。そのことから、今後はコラボレーションしていくための効果的な『ワークショップの開発』,コース生がどんなことに関心と知識があるかを示す『人材マッピングツール』が必要と思われます。今後、これらを具体化したうえで、コース生の皆さんに周知していきますので、ご協力のほどよろしく願います。

■ 代表の赤池から皆さんへのお願い
経済学研究科マネジメント専攻の赤池です。

私は、社会人経験を経て現在経営学を武器に社会的イノベーションに挑戦しようと考えています。その一つとしても、このGCLがより社会的にも意義あるものだと、その価値を向上させたいと思っています。もちろん、そうした大きな目的もありますが、一番の動機はコース生の方々の特性を理解しあい、一緒に活動を楽しみたいという欲求です。GCLから羽ばたいてもつながっている仲間と出会える場所、それがGCL。このFRUITのPJTで皆さんと活動を楽しめていければと思っています。そこで私達の活動趣旨に賛同し、ともに活動したい方からのご連絡をお待ちしています！現在のメンバーは、多くがもともと情報系出身ではないということでもあり、技術的な面だけでなく、考え方としてもGCL全体のことを考えることができる理系分野の方にぜひご協力いただきたいと考えております！もちろん、文系出身者もWelcomeです！みなさんからのご連絡お待ちしております。(報告/青木)

編集・発行：

情報理工学系研究科・GCL 広報企画

渋谷遊野(学際情報学府 M2), 曾我遼(情報理工 M1), 小川奈美(学際情報学府 M1)

発行責任者：木戸冬子(特任助教)

〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学工学部 8 号館 621 号室 GCL 事務局

E-mail : pr_plan@gcl.i.u-tokyo.ac.jp